

歌びとよ水取の夜も恋するか

田中裕明（『夜の客人』）

「いま『澤』から恋の句を頼まれているんですよ」。ある日、裕明はいつものようにちよっと恥ずかしそうに話しました。「へえ。恋の句ですかあ。難しそう」なんて気楽な答えを返してしまいましたが、裕明はまじめな顔で「恋は伝統的に詩歌の主題でしたから」と言っていた。

「澤」は盟友小澤實さんが主宰されている俳誌であるが、年一回、分厚い特集号を出す。2003年4月号は「恋」の特集号だった。俳句では正木ゆう子さんと田中裕明が、短歌では穂村弘さんが、小説では川上弘美さんが作品を寄せていた。「恋の疵」と題された裕明作品は以下の通り。

つれだちて雪解野は翼のごとし
いろまちなか流れけり雪解川
生きよといふ女の声や雪間より
ことほぎの春のしぐれの加賀の國
只一度見し人梅にかくれけん
春雪や音は色なりとソリスト
ぶちねこの吾にもありて恋の疵
洛中やごみに出会ふ油あげ
盆梅を見てその家の去りがたく
うたびとよ水取の夜も恋するか

水取の句は、この段階では「歌びと」ではなく「うたびと」だった。私はいまでも「うたびと」の方が目に焼き付いているが、「歌」と漢字にして句を濃くしたのかもしれない。

水取の夜は、まだまだ寒く、闇を焦がす炎は何かしら人の心を高ぶらせる。関西ではお水取りが終わるとようやく春になる。